

これまで私は、邪馬台国は吉備であること、それと敵対した狗奴国の都が大和であること、260年代末に大和政権がその戦いを制し、自らが主導する全国統一への道筋をつけたことを繰り返し説いてきた。

令和元年に私説の集大成として『邪馬台国吉備説からみた初期大和政権 物部氏と卑弥呼と皇室の鏡を巡る物語』を上梓した〔若井 2019〕。紙数に限りある本稿で千ページに及ぶその拙著をすべて詳説することはできない。そこで、題材を絞ってそれを新たな図表により再説する。その題材とは出土した威信財のことである。以下の記述では、古墳時代の始まりを箸墓古墳の成立とする立場をとる。それは土器年代の布留0式期古相であり、西暦250年代である。二世紀末から248年までの卑弥呼の時代は弥生時代終末期に概ね重なり、土器年代の庄内式併行期に当たる。なお、本稿では一部を除いて引用・参考文献の提示を省略した。これについては拙著をご覧ください。

### 【第一章】三世紀において威信財の配布元は二つあった

三世紀、日本列島各地の有力者は鏡や玉類などの威信財を手にしていった。彼ら地方権力の手許にそれらがあったのは、各自で輸入あるいは生産したからではなくて、その供給を独占する中央の政治的権威からの配布に依ることは疑いない。その配布元の一つが卑弥呼の政権である。239年（景初三年）に「還りに到らば録受し、悉く以て汝が国中の人に示し、国家、汝を哀しむを知ら使むべし。故に鄭重に汝に好き物を賜うなり。」（いつく帰りに着いたら記録して受け取り、すべてを国中の人に示し、中国が汝を重視していることを知らしめよ。そのために丁重に汝に好みの品を賜与するのである）〔魏志倭人伝〕と魏皇帝から告げられた卑弥呼が、それに従い、240年以降にその下賜品を国内各地の豪族に配ったことは間違いない。

画文帯神獸鏡と三角縁神獸鏡とは畿内を中心に出土する。これら鏡の配布元を卑弥呼と見なす考古学者は、この事実を邪馬台国大和説の最大の拠り所とアピールする。240年から260年代末まで三角縁神獸鏡（画文帯神獸鏡ではない！）を配っていたのは卑弥呼および台与である。私はこの通説に同意する。それ以降に三角縁神獸鏡を配布したのは大和政権である。この鏡が畿内に集中するのはそのためである。ただし、邪馬台国に関心を持つ我々がスポットライトを当てるべきは、260年代末までの状況である。中国史書は倭国への言及を266年の来貢（『晋書』武帝紀・泰始二年条）を以て止めてしまうからだ。その後の邪馬台国の消息を中国史書から知り得ないからだ。だから、問題は、266年以前に三角縁神獸鏡を配っていたのが大和政権であるかの否か、である。それが大和政権であるならば主流派考古学者の言う通りである。そうでなければ邪馬台国大和説は間違いである。

270年以降、大和政権は三角縁神獸鏡を国産し、各地に配布した〔若井 2019〕。ただし、国産した鏡は三角縁神獸鏡だけではない。製作技術のルーツは中国にあるとはいえ、中国鏡とは異なる独自の鏡もまた製作した。それらは、従来の弥生時代小形仿製鏡とは隔絶する、高度な技術水準にある。その学術名は統一されておらず、古墳時代仿製鏡とか、倭鏡とか様々に呼ばれるが、本稿では下垣仁志〔下垣 2016〕に倣い「倭製鏡」と呼称する。

倭製鏡の中に、絵文鏡、獸形文鏡という鏡種がある。これは、面径が20センチ未満の中

型・小型鏡である。後述する、芝ヶ原古墳の四獣鏡（面径 12.0 ㍍）、見田大沢 4 号墳の四獣鏡（面径 9.5 ㍍）などがこれに当たる。便宜上、本稿ではこれを「I 型倭製鏡」と呼ぶ。これに対して、内行花文鏡系、方格規矩四神鏡系、鼉龍鏡系（単頭双胴神鏡系）の三つを中心的系列群とする鏡種がある。面径が 20 ㍍を越える大型・超大型鏡である。後述する、下池山古墳の倭製内行花文鏡（面径 37.6 ㍍）、雪野山古墳の鼉龍鏡（面径 26.0 ㍍）などがこれに当たる。便宜上、本稿ではこれを「II 型倭製鏡」と呼ぶ。II 型倭製鏡は、古墳時代に大和政権が製作し、配布した鏡というのが定説である。私はこの定説を受け容れる。

かつては、I 型倭製鏡は古墳時代以降しかも前期中葉以降に製作されたと見られていた。ところが近年、そうではないことが分かってきた。絵画文鏡や一部の獣形文鏡は庄内式併行期に遡ることが明白となった。つまり、倭製鏡の起源は古墳時代ではなくて、その前段階の弥生時代終末期にある。260 年代末までに I 型倭製鏡を製作・配布していたのは誰なのか？それは卑弥呼・台与であるはずだ。ただし、この鏡の副葬時期は古墳時代前期中葉以降に下る例が多いことには留意が必要である〔注 1〕。古墳時代の倭製鏡と技術的に遜色ない I 型倭製鏡を弥生時代終末期に創出し得たのは、倭国政権以外に考えられない。問題は、それが大和政権なのか否か、である。

これらの問いに答えるため、三角縁神獣鏡または画文帯神獣鏡または倭製鏡を出土した墳墓・古墳に着目した。これらの鏡は三世紀の政治中枢から各地の有力者に配布されたものと推定されるからだ。対象は、弥生時代終末期の墳墓および 270 年代前半（三世紀第 3 四半期）以前と推定される古墳とした。古墳の抽出に当たっては、前方後円墳集成編年〔注 2〕（以下、「集成編年」と呼ぶ）の 1 期または 2 期の古墳（または土器編年にてそれに相当する古墳）に限定し、前期古墳広域編年（以下、「広域編年」と呼ぶ）などの諸文献〔注 2〕を参考にした。その結果を〔表 1〕に示す〔注 3〕。なお、出土品については、各々の発掘調査報告書および『日本列島出土鏡集成』〔下垣 2016〕に依拠した。

### 〔表 1：三世紀第 3 四半期以前の墳墓・古墳と出土品〕

以下、この表から読み取れることを箇条書きし、その意義を説明する。なお、以下の事項はすべて 270 年代前半（三世紀第 3 四半期）までのことである〔注 1〕。

事項①：画文帯神獣鏡、I 型倭製鏡、玉類は弥生時代終末期（庄内式併行期）の墳墓からも出土する。

このことは、これらの威信財は三世紀前半段階で流通し始めたことを意味する。

事項②：三角縁神獣鏡は弥生時代終末期の墳墓から出土せず、古墳時代初頭の古墳を以て嚆矢とする。

このことは、この鏡は 239 年の「銅鏡百枚」〔魏志倭人伝〕の一部を構成し、且つ、その時がこの鏡種の始まりとする定説に整合的である。240 年に初めて我が国にもたらされた三角縁神獣鏡は、240 年代に卑弥呼により配布され始め、250 年以降に各地の古墳で副葬され始めた。この鏡が弥生時代終末期の墳墓にないのはそのためである。

事項③：画文帯神獣鏡は主として東部瀬戸内海沿岸や奈良盆地から出土する。

事項④：画文帯神獣鏡は北部九州から出土せず、中国地方からの出土も稀である。

事項⑤：I 型倭製鏡は中国、四国、近畿から出土するが、奈良盆地からは出土しない。

事項⑥：II 型倭製鏡は奈良盆地および近江の集成編年 2 期の古墳に限って出土する。

事項⑦：三角縁神獸鏡は西日本の広域のみならず北陸からも出土する。

事項⑧：玉類は西日本の広域のみならず北陸からも出土する。

事項⑨：画文帯神獸鏡とⅠ型倭製鏡とは共伴しない。

事項⑩：初期古墳（集成編年Ⅰ期または広域編年Ⅰ期）では画文帯神獸鏡と三角縁神獸鏡とは共伴しない。

事項⑪：画文帯神獸鏡は玉類を伴うことが少ない（4/13）。

事項⑫：Ⅰ型倭製鏡と三角縁神獸鏡とは共伴しない。

事項⑬：Ⅰ型倭製鏡は玉類を伴うことが多い（5/6）。

事項⑭：初期古墳（集成編年Ⅰ期または広域編年Ⅰ期）の三角縁神獸鏡は玉類を伴うことが比較的多い（9/17）。

事項⑮：Ⅱ型倭製鏡はすべて玉類を伴う。

以上のことから、次の如き仮説を立てる。

三世紀前半の前・中葉（240年以前）、日本列島では二つの異なる威信財流通域が形成されていた。一つは、Ⅰ型倭製鏡および玉類の流通域である。これは卑弥呼政権を中核とする領域であり、従って中国史書のいう倭国の勢力圏である。240年代、卑弥呼は自らの勢力圏に三角縁神獸鏡という新たな威信財を投入した。ただし、卑弥呼・台与はその配布先としてⅠ型倭製鏡を所有しない有力者を優先した〔事項⑭〕。もう一つは、画文帯神獸鏡の流通域である。これは大和政権を中核とする領域であり、従って大和政権の勢力圏である。260年代末に大和政権が台与政権を打倒した。それにより、二つの威信財流通域が統合された。

次章にて、以上の仮説を検証する。

## 【第二章】威信財の副葬時期の見地からは邪馬台国大和説は成り立たない

2018年9月に、黒塚古墳（奈良県天理市柳本町）の正式な発掘調査報告書が上梓された〔奈良県立橿原 2018〕。これにより、この古墳の全容が明らかとなった。なにより人目を引くのは副葬された大量の鏡である。棺内から画文帯神獸鏡が1面、棺外から三角縁神獸鏡が33面、計34面の鏡が出土した。

黒塚古墳に関して最も曖昧であったことは、その年代である。それが、この正式報告書で漸く明確にされた。それによれば、①黒塚古墳の築造は三世紀後半であり、②ホケノ山古墳→中山大塚古墳・箸墓古墳→黒塚古墳→下池山古墳・桜井茶臼山古墳の順に編年される。ここでのポイントは、黒塚古墳が先、下池山古墳・桜井茶臼山古墳が後であることだ。

この古墳の竪穴式石室床面から土器が出土した。寺沢薫は、それを布留0式期新相に位置づけた〔寺沢 2018〕。橋本輝彦は、それを布留0式期新相～布留1式期最古相とした〔橋本 2017〕。石室内土器であることから、これが埋葬時期と考えられる。布留1式期古相の始まりが西暦270年頃であることから、布留0式期新相は260年代と推定される。よって黒塚古墳の埋葬時期は260年代末頃である。以下、この古墳編年および年代観に基づき考察する。そこで言及される古墳は〔表1〕にある。その考察をまとめたのが〔表2〕である。

### 〔表2：奈良盆地の内と外における威信財の出現時期〕

(A) 三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡の配布元は一貫して大和政権であるというのが通念である。それは本当に正しいのだろうか？

奈良盆地において三角縁神獸鏡の副葬が始まったのは、布留0式期新相の最終段階すなわち260年代末の黒塚古墳においてである。ところが、西日本全体に視野を広げれば、その副葬開始時期は、布留0式期古相すなわち250年代に遡る。藤崎遺跡32次1号墓（福岡県福岡市早良区藤崎）、権現山51号墳（兵庫県たつの市御津町）、安満宮山古墳（大阪府高槻市安満御所の町）などである。三角縁神獸鏡の副葬について、北部九州、山陽、および淀川水系地域が奈良盆地に先行した。それは何故なのか？それは、元々三角縁神獸鏡を配布していたのは大和政権ではないからだ。それを行っていた卑弥呼・台与の居場所は奈良盆地ではないからだ。

### (B) 倭製鏡

奈良盆地において倭製鏡の副葬が始まったのは、桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市外山）や下池山古墳（奈良県天理市成願寺町）においてである。前者から約15面の倭製鏡（調査時には破片）が出土した。後者から1面の倭製内行花文鏡が出土した。桜井茶臼山古墳も下池山古墳も前方後円墳集成編年2期である〔岡林・水野 2018〕。よって、どちらも270年以降の古墳である。

それでは、倭製鏡の副葬は奈良盆地に始まるのだろうか？否、そうではない。南山城の芝ヶ原古墳（京都府城陽市寺田大谷）から1面の四獣鏡が出土した。宇陀の見田大沢4号墳（奈良県宇陀市菟田野見田・菟田野大澤）から1面の四獣鏡が出土した。芝ヶ原古墳は、「庄内式新段階から布留式最古段階古相であり、ホケノ山古墳より1段階古い可能性が高い」〔長友 2014〕古墳である。従ってそれは240年代の古墳である。見田大沢4号墳は、布留0式期古相併行期、前方後円墳集成編年1期の古墳である。従ってそれは250年代の古墳である。芝ヶ原古墳も見田大沢4号墳も淀川水系に属する。つまり、倭製鏡の副葬に関して、淀川水系地域は大和川水系の奈良盆地より早かったのである。それは何故なのか？それは、元々I型倭製鏡を製作し、かつ配布していたのは大和政権ではないからだ。それを行っていた卑弥呼・台与の居場所は奈良盆地ではないからだ。

### (C) 玉類

大和政権の本拠地である奈良盆地の古墳で、玉類の副葬が始まったのはいつのことだろうか？実は、それは三角縁神獸鏡の副葬より遅い。そのことを知らしめたのが黒塚古墳である。

黒塚古墳の調査結果には、大量の鏡が出土したことの影に隠れて、あまり注目されていない重大事がある。それは、そこにある物ではなくて、そこにはない物である。玉類が全く出土していないことである。奈良盆地の古墳のうちで黒塚古墳に先行するのはホケノ山古墳（奈良県桜井市箸中）、中山大塚古墳（奈良県天理市中山町）、上牧久渡3号墳（奈良県北葛城郡上牧町）であるが、これらでも玉類は見つからなかった。

黒塚古墳に後出する、下池山古墳や桜井茶臼山古墳では玉類が出土した。下池山古墳からは、ヒスイ製勾玉が2個、碧玉製管玉が7個、ガラス小玉が44個である。桜井茶臼山古墳からは、ヒスイ製勾玉が1個、碧玉製管玉が6個、ガラス管玉が2個、ガラス玉類が少数個である。

このことは、奈良盆地の古墳では玉類の副葬が黒塚古墳までは行われず、下池山古墳・

桜井茶臼山古墳を以て始まったことを示す。つまり、奈良盆地で玉類の副葬が始まったのは 270 年以降であるわけだ。

従来の考古学がともすれば看過してきた、ないしは軽視してきたこの事実は、邪馬台国の所在地論における重要ポイントの一つである〔若井 2019〕。というのは、魏志倭人伝の締めくくりの次のようにあるからだ。

「台与は、倭の大夫である率善中郎将の掖邪狗ら二十人を派遣して、帰国の途に就く張政らを送らせた。その上で掖邪狗らは洛陽に至り、男女の奴隸三十人を献上し、白珠五千孔、青大句珠二枚、珍しい文様の錦を二十四、朝貢した。」

倭国王・台与は、「白珠五千孔」「青大句珠二枚」という二種の玉類を魏王朝へ貢いだ。このうち、「白珠五千孔」は孔の開いた白玉を五千個、「青大句珠二枚」は青色の大型のヒスイ製勾玉を二個と解されている。台与は魏王朝に玉類を、しかも数ある玉類の中でも最高級品を朝貢したわけだ。魏の皇帝が大いに喜んだことは間違いない。

魏は 265 年を以て滅んだ。となると、件の朝貢はそれ以前ということになる。ところで、奈良盆地で玉類の副葬が始まるのは 270 年以降である。となると、265 年以前に玉類を朝貢した台与の政権が大和政権であるとは考えにくい。玉類の問題は邪馬台国大和説が抱える大きな弱点である。台与の居場所すなわち邪馬台国は、265 年以前に玉類が権力者の間で普及していた場所であるはずだ。

一方、奈良盆地の外では、玉類の副葬は枚挙にいとまがない。古墳時代前期初頭（布留 0 式古相併行期＝箸墓古墳併行期）までの墳墓・古墳に限定して見てみよう。

中部地方以東では、福井県福井市の小羽山墳墓群<sup>おぼやま</sup>、千葉県市原市の神門 3・4・5 号墳<sup>こうど</sup>、長野県松本市の弘法山古墳<sup>こうぼうやま</sup>、岐阜県美濃市の美濃観音寺山古墳<sup>みのかんのんじやま</sup>から多数の玉類が出土した。

西日本での代表例を挙げてみよう。

弥生時代後期後半の出雲の西谷 3 号墓<sup>にしだに</sup>（島根県出雲市大津町）では、第 4 主体部から 20 個のガラス管玉からなる胸飾り 1 点、第 1 主体部から 250 個以上の玉類が出土した。

弥生時代後期後半の吉備の楯築弥生墳丘墓<sup>たてつき</sup>（岡山県倉敷市矢部）では、ヒスイの勾玉、瑪瑙<sup>めのう</sup>の棗玉<sup>なつめだま</sup>、碧玉<sup>へきぎよく</sup>の管玉<sup>くだだま</sup>からなる首飾りを始めとして夥しい数の玉類が出土した。

弥生時代後期末の丹後の赤坂今井墳墓<sup>あかさかいまい</sup>（京都府京丹后市峰山町）では、第四埋葬部からガラス勾玉、ガラス管玉、碧玉管玉からなる三連の豪華な首飾りなどが出土した。

弥生時代終末期最終段階の山城の芝ヶ原古墳から、ヒスイ製勾玉 8 点、碧玉製および緑色凝灰岩製の管玉 187 点、ガラス小玉 1264 点が出土した。

古墳時代前期初頭（箸墓古墳併行期）の播磨の権現山 51 号墳や摂津の安満宮山古墳から大量のガラス小玉が出土した。

大和国であっても、盆地の外では玉類がもたらされていた。奈良盆地の東、宇陀市南部の口宇陀盆地<sup>くちうだ</sup>にある、見田大沢 2 号墳および 4 号墳である。ここから玉類が出土した。

以上より、魏王朝に玉類を朝貢した台与政権は大和政権とは考えにくく、邪馬台国は奈良盆地の外にあった推定される。それでは、それはどこなのか？以下に示すように、玉類という見地からは吉備が相応しい。

一口に玉類と言っても、その種類と材質は様々である。そのうち、白眉<sup>ひめかわ</sup>とも言えるのはヒスイ製勾玉である。弥生時代の勾玉は、遅くても弥生時代前期末に、姫川（新潟県糸魚川市）流域すなわち糸魚川地域を原産とするヒスイを素材にして、北部九州で製作され始め

た。弥生時代中期におけるヒスイ勾玉の出土数は、北部九州が他地域を圧倒した。ところが、弥生時代後期後半になると突如として流通の中心地が吉備へ移った。例えば、黒宮大塚墳丘墓（岡山県倉敷市真備町）から 1 個のヒスイ勾玉が出土している。それだけではない。数ある勾玉の内の最上等品は、ヒスイ製丁字頭定形勾玉である。勾玉の頭部には紐を通す孔がある。丁字頭とは、その孔に向かって放射状に数本の細い線が刻まれているものの謂いである。チョウジノキという樹木の蕾に似ていることに因んだ名称とされる。弥生時代後期後半の楯築弥生墳丘墓からヒスイ勾玉が出土したことは既に述べた。それは、緑色半透明の良質なヒスイを使った、全長 41.6 ミリの丁字頭定形勾玉である。現状では、これは、弥生時代後期～終末期の西日本の墓から出土したヒスイ勾玉の中で最大のものである。吉備では他に雲山鳥打 1 号墳丘墓（岡山県岡山市北区）からもヒスイ製丁字頭定形勾玉が出土している。ヒスイ勾玉の内でも上等品は、北部九州よりも吉備での副葬が優勢となったのである。

次の弥生時代終末期にも引き続き吉備でヒスイ勾玉は副葬された。鑄物師谷 1 号墳丘墓（岡山県総社市清音三因）から 4 個のヒスイ勾玉が出土した。その内の一つは丁字頭勾玉である。矢藤治山墳丘墓（岡山市北区）から 1 個のヒスイ勾玉が出土した。鯉喰神社墳丘墓（岡山県倉敷市矢部）は未だ発掘調査されていないが、大正時代に鯉喰神社の改築に際して地下の石室から 1 個の勾玉が取り出されたとされる。

次の古墳時代初頭にもヒスイ勾玉は副葬された。備前の浦間茶臼山古墳（岡山市東区浦間）から勾玉が出土したと伝えられる。備前の操山 109 号墳（岡山市中区平井）から 8 面の鏡とともに「勾玉の類」が出土したとの江戸時代の古文書がある。備中の秦上沼古墳（岡山県総社市秦）から、1 個の硬玉製勾玉が出土したと伝えられる。

山城の芝ヶ原古墳出土の玉類について、理化学的分析に考古学的考察を加えた中村大介らは、その勾玉を「芝ヶ原古墳の勾玉は全て亜定形であり、後期後半以降、翡翠製勾玉が集中する吉備地域の鑄物師谷 1 号墓資料と丁字頭を除き、形態と規模が類似する」〔中村ら三名 2014〕と評した。ヒスイ勾玉だけではない。中村らは、芝ヶ原古墳のガラス小玉を「芝ヶ原古墳のガラス小玉は全てカリガラスと判断され、これは古墳時代前期の様相に通じる。吉備地域の矢藤治山墳丘墓資料も全てカリガラスであり、瀬戸内東部から畿内では、この様相が弥生時代末～古墳時代初頭に遡りうる。ガラス素材の組成や丁字頭勾玉など若干の差異はあるが、芝ヶ原古墳と吉備地域の一部は玉類で共通項が多い」〔中村ら三名 2014〕と述べる。芝ヶ原古墳は、同時代の吉備の墳墓と玉文化圏を共にしていたのである。おそらく、芝ヶ原古墳の 8 個のヒスイ勾玉と大量のガラス小玉は吉備からもたらされたものであろう。

弥生時代終末期の最終段階、すなわち 240 年代は卑弥呼の時代である。この時期に、我が国から出土するガラスの材質が大きく変化した。その特徴は、数量が多く且つ均一性が高いことであり、具体的には大量の小玉の殆どすべてが淡青色のカリガラスであることだ。それが、大賀分類の BD I 型（青）である。これは谷澤分類の IPB-①に当たる〔谷澤 2020、頁 57〕。以下、谷澤分類の表記を採る。吉備の鑄物師谷 1 号墳丘墓、吉備の矢藤治山墳丘墓、山城の芝ヶ原古墳にて大量のガラス小玉が副葬された。鑄物師谷 1 号墳丘墓出土品の大部分、矢藤治山墳丘墓出土品のすべて、芝ヶ原古墳出土品のすべてが IPB-①である。

この状況は、次の布留 0 式古相併行期すなわち 250 年代に引き継がれた。筑後の津古生掛

古墳（福岡県小郡市三国が丘）、播磨の権現山 51 号墳、播磨の吉島古墳（兵庫県たつの市新宮町）、讃岐の奥 14 号墳（香川県さぬき市寒川町）、讃岐の丸井古墳（香川県さぬき市前山）、阿波の宮谷古墳（徳島県徳島市国府町西矢野）、摂津の安満宮山古墳、信濃の弘法山古墳（長野県松本市並柳）、但馬の森尾古墳（兵庫県豊岡市森尾）から大量のガラス小玉が出土した。これらの殆どすべてが IPB-①である。

このように、弥生時代終末期最終段階～古墳時代初頭に、ほぼ単一のタイプ（IPB-①）から成るガラス小玉を副葬する墳墓・古墳が一斉に現れた。重要なのは、「前時期までみられた多様な種類のガラス製玉類の流通は、IPB-①を残してほぼ途絶え、IPB-①の分布も限定的となる」〔谷澤 2020、頁 79〕ことである。このことは、「この時期に、舶載玉類の流入・流通形態が大きく変化」〔谷澤 2020、頁 76〕したことを示す。

私は、IPB-①を国内各地に配布したのは卑弥呼であると考え。これらの古墳ではしばしば古相の中国製三角縁神獣鏡（およびその関連鏡）が共伴するからだ。津古生掛古墳、権現山 51 号墳、吉島古墳、安満宮山古墳、森尾古墳がそれである。あるいは、芝ヶ原古墳では I 型倭製鏡が共伴するからだ。240 年代に三角縁神獣鏡（およびその関連鏡）や I 型倭製鏡を配布したのは卑弥呼である。となると、これら古墳のガラス小玉は、三角縁神獣鏡（およびその関連鏡）や I 型倭製鏡と一緒に卑弥呼から被葬者に配布されたのであろう。

そこで改めて、ガラス小玉が IPB-①のみで構成される古墳の分布をみてみよう。弥生時代終末期最終段階では、吉備（鋳物師谷 1 号墳丘墓、矢藤治山墳丘墓）および山城（芝ヶ原古墳）であり、古墳時代初頭では、筑後（津古生掛古墳）、播磨（権現山 51 号墳、吉島古墳）、讃岐（奥 14 号墳、丸井古墳）、阿波（宮谷古墳）、摂津（安満宮山古墳）、信濃（弘法山古墳）、但馬（森尾古墳）である。これらの分布域は、北部九州から瀬戸内海沿岸を経て淀川水系へと伸びる長いベルト地帯を主体としている。その中心は奈良盆地ではない。のみならず、近畿ですらない。大量の IPB-①を全国各地の有力者に配ったのは、弥生時代終末期最終段階の卑弥呼政権である。私見ではそれは吉備王権である。列島東西の有力者は、瀬戸内海の海路により吉備の卑弥呼のもとに参向し、鏡とともに IPB-①を下賜されたのである。

さて、〔表 1〕に戻ろう。初期古墳では、I 型倭製鏡と玉類、三角縁神獣鏡と玉類はしばしば共伴する〔事項⑬⑭〕。260 年代末までにこの三種の威信財を配布していたのが同一の政治権力であるからだ。それが卑弥呼・台与政権である。繰り返すが、それは大和政権ではない。一方、三世紀前半に画文帯神獣鏡を配布していたのは、大和政権の有力者である。その勢力圏は東部瀬戸内海沿岸から奈良盆地にかけての地域である〔事項③〕。庄内式期の画文帯神獣鏡の出土古墳（萩原 1 号墓、阿王塚古墳、綾部山 39 号墓、ホケノ山古墳）を見れば、その有力者集団は、庄内式期に東部瀬戸内海沿岸から河内を経て大和川水系沿いに纏向に入ったことが窺える。庄内式期に纏向遺跡を開発したのは彼らである。私説では、彼らが物部氏の祖である〔若井 2019〕。

とはいえ、画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡・玉類とが共伴する墳墓・古墳があるのは事実である。これらは二つのタイプに分けることができる（タイプ I と II）。タイプ I は、阿波の萩原 1 号墓（徳島県鳴門市大麻町）、播磨の綾部山 39 号墓（兵庫県たつの市御津町）、讃岐の奥 14 号墳（香川県さぬき市寒川町）である。これら三つに共通するのは、画文帯神獣鏡が玉類と共伴すること、倭製鏡や三角縁神獣鏡がないこと、東部瀬戸内海沿岸にあることである。この内で二つ（萩原 1 号墓と綾部山 39 号墓）は庄内式期の墳墓である。タイプ II は、備前の備前車

塚古墳（岡山県岡山市中区四御神・湯迫）、<sup>にしもとめづか</sup>撰津の西求女塚古墳（兵庫県神戸市灘区都通）、山城の  
<sup>つばいとおつかやま</sup>椿井大塚山古墳（京都府木津川市山城町椿井）、大和の黒塚古墳、大和の桜井茶臼山古墳である。  
これら五つに共通するのは、画文帯神獸鏡が多数の三角縁神獸鏡と共伴すること、260 年  
代末以降の古墳であることだ。この内で玉類を伴うのは桜井茶臼山古墳だけである。

タイプ I は、大和政権傘下の有力者の墓である。そこに画文帯神獸鏡があるのはその証  
左である。ただし彼らは卑弥呼政権とも繋がっていた。そこに玉類があるのはそのため  
である。それは、彼らの領域である東部瀬戸内海が、倭国（その都が邪馬台国）と狗奴国（私見で  
は、その都が大和）という二大勢力圏の境界であったからだ。彼らが玉類を入手した時期は、  
邪馬台国と大和との戦争が本格的になる以前と推定される（魏志倭人伝によれば、「倭国」対狗奴  
国戦争の勃発は 246 年頃である）。タイプ II もまた、大和政権側の人物の古墳である。そこに副  
葬された大量の三角縁神獸鏡は、邪馬台国からの戦利品であると推定する。

以上より、次のように結論する。

倭国王・卑弥呼は、240 年以前に自らに従う列島東西の有力者に I 型倭製鏡と玉類を配  
布した〔事項①〕。240 年以降、卑弥呼・台与はその配布品に三角縁神獸鏡を加えた〔事項②〕。  
ただし、その配布先として I 型倭製鏡を所有しない有力者を優先した〔事項⑩〕。これらが  
倭国の威信財である〔事項⑬⑭〕。その流通域が倭国の勢力圏である。それは、少なくとも、  
西は北部九州から東は越前までの広域に及んだが〔事項⑤⑦⑧〕、奈良盆地を含まなかった〔事  
項⑥〕。一方、240 年以前に大和政権有力者（私説では、物部氏の祖）は、スメラミコト（後の「天  
皇」）麾下の有力者に画文帯神獸鏡を配布した〔事項①〕。これが大和政権の威信財であり〔事  
項⑨⑩⑪〕、私説では狗奴国の威信財である〔若井 1019〕。その流通域は東部瀬戸内海沿岸か  
ら、大和川を経て奈良盆地までである〔事項③④〕。260 年代末に大和政権は台与政権を打倒  
し、邪馬台国が所有した鏡・玉類を我が物とし、それらを製作する工人を傘下に組み入れ  
た。黒塚古墳、椿井大塚山古墳、備前車塚古墳などの大量の三角縁神獸鏡は、この際の戦  
利品である。270 年初頭以降、大和政権は三角縁神獸鏡の国産に着手するとともに、II 型  
倭製鏡の製作を始めた〔事項⑥〕。こうして、大和政権がすべての威信財を配布することと  
なった〔事項⑬〕。

### 【第三章】卑弥呼・台与の威信財の出土分布は吉備が邪馬台国であることを窺わせる

畿内とは、撰津、山城、大和、河内、和泉の五ヶ国を指す。この地域を潤す二大河川が、  
淀川と大和川である。邪馬台国大和説は、邪馬台国畿内説ともいう。考古学者の間で主流  
の説である。多くの考古学者は、弥生時代終末期（庄内式期）～古墳時代初頭（布留 0 式期古相）  
の畿内を十把一絡げにして、大和政権の勢力圏と見なす。そのため彼らは、芝ヶ原古墳の  
被葬者を大和政権傘下の豪族とすることに疑問を抱かない。それが山城にあるからだ。同  
様に、安満宮山古墳の被葬者を大和政権に従う地域首長であると決めつけている。それが  
撰津にあること、そして、最古段階の三角縁神獸鏡が副葬されていたからだ。

しかし私が警鐘を鳴らしたいのは、この認識は間違いであるということだ。卑弥呼の時  
代、すなわち三世紀前半の畿内の政治情勢を正しく紐解くには、淀川水系と大和川水系と  
を分けなければならない。淀川水系は倭国政権の勢力圏、大和川水系は大和政権の勢力圏  
であった。そして、魏志倭人伝が記す「倭国」対「狗奴国」戦争の主戦場が畿内であった。  
この戦いを制したのが狗奴国すなわち大和政権勢力圏であり、それは三世紀後半のことで



ある。ここに、淀川水系と大和川水系とが一体化して大和政権のお膝元となった。ここに至って初めて、真の意味での畿内<sup>いみち</sup>が成立したのである。

淀川水系と大和川水系とが異なる勢力圏であったこと、淀川水系有力者の方がより早く玉類、倭製鏡、三角縁神獸鏡を手にしたこと、大和川水系有力者の方がより早く画文帯神獸鏡を手にしたこと。これらのことは考古学的に確かめることができる。〔表 1〕を見ていただきたい。淀川水系に属する、庄内式期最新段階～布留 0 式期古相の墳墓・古墳が、丹波の今林<sup>いまばやし</sup> 8 号墓（京都府南丹市園部町内林町）、山城の芝ヶ原古墳、摂津の安満宮山古墳、大和（宇陀）の見田大沢 4 号墳の四つである。これらに副葬された鏡と玉類は三世紀前半に卑弥呼が配布したものである。それに対して、大和川水系に属する同時期の墳墓・古墳が、大和（奈良盆地）のホケノ山古墳〔注 4〕、大和（奈良盆地）の上牧久渡 3 号墳の二つである。

それでは、威信財という視点から眺めると、二人の女王、卑弥呼と台与はどの地に姿を見せるであろうか？その手筈として、〔表 1〕の墳墓・古墳を次の五つのグループに分ける〔注 1〕。

グループ A：I 型倭製鏡を有し、画文帯神獸鏡と II 型倭製鏡との双方を欠く墳墓・古墳

グループ B：三角縁神獸鏡を有し、画文帯神獸鏡と II 型倭製鏡との双方を欠く古墳

グループ C：画文帯神獸鏡を有し、I 型倭製鏡と三角縁神獸鏡との双方を欠く墳墓・古墳

グループ D：画文帯神獸鏡と三角縁神獸鏡との双方を有する古墳

グループ E：II 型倭製鏡を有し、画文帯神獸鏡を欠く古墳

以上のうち、グループ A と B とは、260 年代末以前に卑弥呼・台与の傘下にあった人物の墓である。それはすなわち女王政権の勢力圏を示す。グループ C は、260 年代末以前に大和政権の傘下にあった人物の墓である。グループ D と E とは、260 年代末～270 年代前半に大和政権の傘下にあった人物の墓である。この時期に至って初めて、大和政権の勢力圏が山城（椿井大塚山古墳）、摂津（西求女塚古墳）、近江（雪野山古墳）、備前（備前車塚古墳）に及んだことが分かる。私説では、備前車塚古墳に眠るのが、『古事記』『日本書紀』に登場する大吉備津彦である〔若井 2019〕。崇神天皇の命により、「四道将軍」（『紀』）の一人として「西道」（『紀』）に派遣され、吉備を平定した皇族武人である。

グループ A と B とに話を戻そう。両者を併せてその所在地を図示したのが〔図〕である。この分布域がすなわち卑弥呼・台与の勢力圏である。それは、西は筑前・豊前、中は中国（山陽および山陰）・四国・北近畿・淀川水系・近江、北は越前に及ぶ広大な地域である。

### 〔図：卑弥呼・台与が配布した鏡の出土地〕

これを見ると、三世紀の倭国の範囲は九州に留まるとい説が成り立ち難いことが分かる。分布の中心はどこかと言えば、岡山県南部が最も相応しい。先述したように、弥生時代後期後半から古墳時代初頭まで、ヒスイ製勾玉が集積した地は吉備である。そのことと併せて鑑みれば、邪馬台国は吉備であると結論する。私説では、卑弥呼の館の場所は津寺遺跡（岡山県岡山市北区津寺）であり、卑弥呼の墓は鯉喰神社弥生墳丘墓（岡山県倉敷市矢部）である〔若井 2019〕。

〔注 1〕尾張の東之宮古墳<sup>ひがしのみや</sup>（愛知県犬山市犬山）は、集成編年 2 期、広域編年Ⅲ期、三世紀第 4 四半期～四世紀初

頭の前期中葉古墳である。ここからⅠ型およびⅡ型の倭製鏡が出土している。奈良盆地の<sup>やまとてんじんやま</sup>大和天神山古墳（奈良県天理市柳本町）は、三世紀第4四半期以降と目されている古墳である。ここから、Ⅱ型倭製鏡を伴わずに、Ⅰ型倭製鏡が出土している。【第三章】におけるグループ分けが有効であるのは三世紀第3四半期までである。それを承知の上で敢えて分類すれば、東之宮古墳はグループE、大和天神山古墳は分類不能となる。三世紀第4四半期以降の古墳でこのグループ分けが機能しないのは、270年以降に大和政権による地方支配が本格化することで、旧来の威信財システムが完全に瓦解したからである。

〔注2〕前方後円墳集成編年は、広瀬和雄・和田晴吾（編）『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』（青木書店 2011年）、中国四国前方後円墳研究会（編）『前期古墳編年を再考する』（六一書房 2018年）による。前期古墳広域編年は、岩本崇『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』（六一書房 2020年）による。その他に、『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』（学生社 2011年）中の大久保徹也および菅原康夫の論考、『邪馬台国をめぐる国々』（雄山閣 2012年）中の久住猛雄の論考、『大集結 邪馬台国時代のクニグニ』（青垣出版 2015年）中の高橋浩二および高野陽子の論考、岸本道昭『播磨の前方後円墳と倭王権』（同成社 2022年）等を参考とした。

〔注3〕阿波の宮<sup>みやだに</sup>谷古墳（徳島市国府町）は布留0式併行期の前方後円墳である。その前方部の墳丘裾部から三面の三角縁神獣鏡が出ている。おそらく前方部にも埋葬施設があり、その三面はそこに副葬されていたものと推定されている。こうした事情により、その三面が布留0式併行期に副葬されたとは言えない。後円部石室に副葬されていたのは一面の重圏文鏡である。これは国産鏡であるが、本稿でいう倭製鏡に該当しない。以上の理由により、宮谷古墳は〔表1〕のリストに入れなかった。

〔注4〕私説では、ホケノ山古墳の被葬者は『記』『紀』に登場するイカガシコヲであり、物部氏の祖である〔若井 2019〕。

#### 【引用・参考文献】

- ◎岡林孝作・水野敏典 2018「編年的位置」『黒塚古墳の研究』八木書店
- ◎下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- ◎谷澤亜里 2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- ◎寺沢薫 2018「出土土器からみた黒塚古墳の築造時期の位置づけ」『黒塚古墳の研究』八木書店
- ◎長友朋子 2014「芝ヶ原古墳出土土器の位置づけ」『城陽市埋蔵文化財調査報告書 第68集 芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書』城陽市教育委員会
- ◎中村大介・田村朋美・藁科哲男 2014「芝ヶ原古墳出土玉類の理化学的分析と考察」『城陽市埋蔵文化財調査報告書 第68集 芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書』城陽市教育委員会
- ◎奈良県立橿原考古学研究所（編） 2018『黒塚古墳の研究』八木書店
- ◎橋本輝彦 2017「纏向遺跡と纏向古墳群から見た初期ヤマト王権と黒塚古墳」『王権は移動したか 纏向から柳本へ』（2017/11/3 橿原市）講演会資料集：奈良県立橿原考古学研究所
- ◎若井正一 2019『邪馬台国吉備説からみた初期大和政権 物部氏と卑弥呼と皇室の鏡を巡る物語』一粒書房